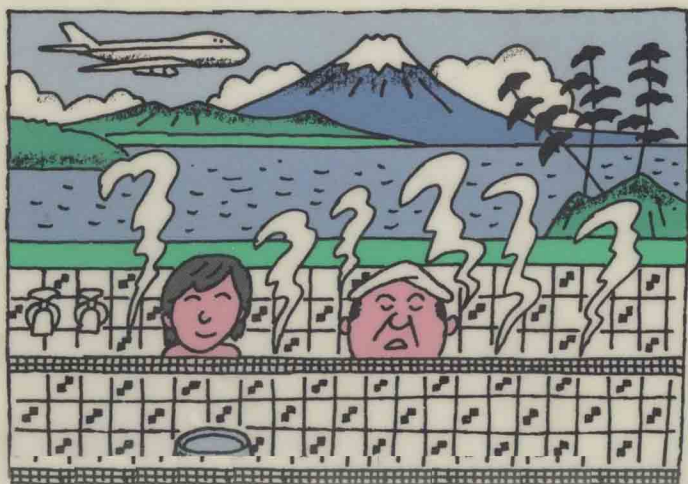


幸せな国 ニッポン

中国人が見た日本

リー・ウッドホン・著



著者略歴

李 活雄 (Lee Wood Hung)

リー ウッドホン

1952年、中国の広州に生まれる。
生後間もなく香港に渡り、国籍は
中国だが育ちは華洋雑居の香港。

1973年来日。三鷹のアジア・ア
フリカ語学院で日本語を学び、翌
年東京外国語大学に入学。現在筑
波大学大学院の地域研究研究科の
日本研究コースに在籍。

「外国人による日本語弁論大会」
などに出て、第1位3回、第2位
1回。

幸せな国ニッポン

定価 870円

昭和53年7月1日 初版発行

著 者 李 活 雄

発行者 沖 中 美 実

印 刷 株式会社 上野印刷所

発行所 株式会社 青也書店

東京都文京区本郷3-40-3

電話・812-7201 (代) 振替・東京9-99805

©1978 Lee Wood Hung

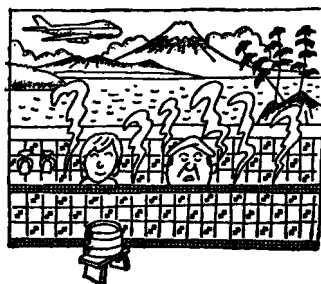
0030-001513-3859

乱丁・落丁はお取替えいたします

リー・ウッドホン・著

幸せな国ニッポン

中国人が見た日本



まえがき — 日本との出会い —

一九七三年六月末、私は香港を離れて日本語修業の旅に出ました。

まず八カ月ほど、三鷹にあるアジア・アフリカ語学院で、日本語のイロハを習得し、ひき続き、東京外国語大学の特設日本語学科に籍をおいて、本格的(?)に日本語、そして日本語学を習い始めました。

四年間の歳月は、アッという間に過ぎ去り、今年の四月十六日に、はや卒業式。卒業証書をもらうからには、私は日本語学をマスターしましたと一応言わなければなりません。

さて、そもそもなぜ、私が遙々日本までやって来て、日本語を学ぼうとしたかというところ、それはたまたま縁があらたからとしか言いようがないような気がします。

思い出してみれば、私が字が読めるようになった頃から、すでに「味の素」のネオンサインが夜の香港を飾っていた記憶は、いまだに鮮やかです。私達はその「の」が所属を意味することとは、容易に見当がつき、それを、広東語流に「味之素」と読んでいました。

それにいつ頃のことか、うる覚えではっきりわかりませんが、「用心棒」や「座頭市」などのチャンバラ映画を見たことは、一回や二回ではありません。そこから受けた日本語のイメージは、とても込み入ったものだったと覚えています。

勇ましい侍が登場して来ると、だいたいきまって、のどにこもった声でしゃべり出す。まるで獣が怒鳴っているようで、聞いているほうは耳がガンガンするばかりで、耳ざわりもはなはだしいものでした。

それに対して、しとやかな大和撫子なごしこが出て来ると、何を言っているのかわかりませんが、音の響きとしては軽やかで、とても美しい。それに彼女らのもの静かで可憐な姿には、子供ながらも大変魅力を感じました。

しかし、ただ日本の女優さんへのあこがれで日本語を覚えようと思ったわけではありません。私の日本語学習のきっかけは、ほかにあるのです。

それは確か、すでに八年前のことです。まだ、私が中学四年生の頃でした。

当時、香港のテレビでは、語学番組は、英語講座しかありませんでした。ところがある日、「日本語講座」という番組の放送予定が、『香港電視テレビ』に載っていたのです。

そのページには、「五十音図」と書かれた不思議な図表が載せてありました。「平仮名ひらがな」と説明されたミミズが踊っているような模様の横に、「漢字」と称する字が、安以宇衣於、加幾

久計己……と並んでいました。漢字の専門家であるはずの私にも、何のことやらチンプンカンブンでした。

でも、少し日本語を覚えたら、今度日本映画を見るのにも、おもしろさが増すだろうという、きわめて単純な理由で、その日本語講座を見ることにしました。

時間がくると中国の箏^{ごう}を思わせるような、しかも日本情緒の溢^{あふ}れた音楽が流れて、和服姿の日本人の女性一人、そしてもう一人の背広姿の男性が画面に出てきました。流暢^{りゅうちやう}な広東語解説と、彼の名前からみて男のほうは、どうも広東人らしい。彼の日本語を聞いて、別に軽やかとか、美しいとかいう感じは受けなかったのですが、チャンバラ映画に出てくる侍たちのしゃべり方とは、全然、別なもののように感じました。

一回目の勉強は五十音図についての紹介と、一から十までの数え方、そして「こんにちは、お元気ですか」や「さようなら」ぐらいの会話にとどまりました。

映画ではあまりにも早口で、まるで機関銃の連発のように聞えて、圧倒されてしまったから、さぞ日本語の発音も難しいだろうと思いましたが、やってみたら意外と簡単で、全然英語の比ではありません。

それに平仮名は、結局漢字からきたということがわかり、特に一から十までの数え方などは、実際にじっくりと発音を聞いてみると、広東語に非常に近いことも感じられました。

その上、よくのみ込めたせい、その番組を見終わって覚えた充実感、快いものでした。

その二回目を見たのは、一週間後のことでしたが、それからもとだえなく見続けていました。そして学校の授業中にも、時々、平仮名の練習をしたりするようになりました。

ところが視聴率が悪かったせい、**「日本語講座」**は僅か二カ月で放送中止となってしまったのです。テレビ局の商業主義に大変不満でしたが、どうしようもありませんでした。そして私の日本語勉強も、それっきりでした。

しかし、そのごちそうを食べ残したような気持が、私の来日のきっかけともなったわけですね。

さて、夢みたいな話で、数えてみれば、日本にきてはや六年目。その間、二回ほど香港へ帰ったことを除いて、ずっと日本にいたわけです。当然その時に応じて、私なりに感じたことがたくさんあります。

ただし、永いことつれそつた夫婦じゃないですが、**「長年のつき合い」とは恐ろしいもので、**ずっと日本で生活していると、いつとはなく日本の風俗習慣に慣れてしまつて、まわりに対する新鮮味が薄れてきたり、感受性も鈍くなつてしまいます。場合によっては、日本文化の中に巻き込まれ、あるいはとけ込んでしまうということも、少なくありません。

例えば二年前の夏休みに、香港へ一時帰国した時のことですが、ぎゅうぎゅうづめのバスの

中で、「ちょっとすみません、通らせて下さい」と私が、例の如く、頭を下げ、片手を前に出して上下に振りながら、先へ進み、そしてようやくバスから降りたら、「おい、リー、どうでしたの？ 手を振ったりして、妙なことをするんだね」と、同行していた香港の友人に言われて、ハッとしました。

日本へ留学してきたからといって、日本人の変な手まねまですることはないじゃないか、と言わんばかりでした。

もちろん、確かにそれは「日本文化」であることは明らかですが、それが粹でかつこういういから私もまねしたわけではなく、それどころかむしろ初めは、多少奇妙なしぐさとさえ感じられたのです。

しかしそれにもかかわらず、一種の反射的なジェスチャーとして私がいつもそれを忠実に演じていたとは、文化の前に個人の存在はいかにのみ込まれやすいものか、あらためて思い知らされました。

このように私は日本に来てこのかた、いつもしっかり我を守り、マイペースで生活してきたわけではありません。どちらかというと、「郷にはいれば、郷に従え」ということわざをいつも頭に入れているほうだと思えます。いや、より正確な言い方をすると、意識しないうちに、自然にまわりの環境に適応してしまう場合が多いというべきでしょう。

ろで、去年の夏休みの終わり頃のことでしたが、青也書店から「日本での体験談を一冊の本に、まとめてみないか」との依頼がきました。その時、私はちょうど文部省主催の広東語短期集中講座で、広東語講師として参加していました。それに卒業論文などのこともあって、どう考えてもその翌年の三月からでなければ、とても本など書く余裕はありません。事情を話してみたら出版社の方も、大変ものわかりよく待つことにしてくれました。

それからの歳月というのは夢のように過ぎさり、振り返ってみれば、こうして机に向かつてこの本を書き出したのはすでに三カ月前のことです。その間まさに原稿に追われてプロ作家の思いをたっぷり味わった毎日でした。書きたいことはまだたくさんありますが、大学院の授業が始まってはや十日間ほどたちましたし、これ以上とても書く余裕がありません。これはしろうと皆共通の運命で仕方ないことでしょう。

とにかく、今まで私は日常生活や大学での勉強を通じてずっと日本文化に接触してきて、いわば吸収する一方だったと思います。国際貿易問題じゃないですが、そうテイクするばかりではあまり氣持のいいものではありません。やはりギブもしなければいけないと思います。そう

いう意味では、今回この機会に恵まれ、私なりの日本観や体験談などお粗末ながらもありのまを言いたい放題させて頂くことができて大変幸いだと思っています。

なお、私は今筑波大学大学院の地域研究研究科の「日本研究コース」に在籍し、つまり日本文化に関して学んでゆくのはこれからののだと言えるわけです。「日本文化論」などおこがましきものはだしいのでありまして、大学院の先生方から「ナマイキだ」なんて思われたらかないませんし、ここであらかじめお断わりしておきます。

終わりに、ややもすれば途絶えがちの私の執筆を辛抱強く見守ってくださった出版社の増永和也さんに厚くお礼を申し述べたいと思うほかに、この本を書くに際し、文章の推敲すいこう役はもちろん、細部にわたっての相談にも快くのってくださいました新村昌弘さんに心から感謝の意を表したい次第であります。

昭和五十三年五月七日 筑波大学追越寮にて

李リ活雄ワフドキン

幸せな国ニッポン

目次

まえがき — 日本との出会い — 3

第一章 日本の弁論大会に出場して

スピーチコンテスト荒らし・17

日本のお風呂・20

酒を通して垣間見た日本・26

日本での新しい発見・31

第二章 わけのわからない日本語

わが愛すべき漢字・37

外来語って、ナンデスカ?・48

「お」という曲者・58

不思議な「た」という日本語・64

第三章 学生天国ニッポン

嗚呼、花の大学生・73

マージャンは大学の必修科目?・79

アルバイト戦線異常なし・85

第四章 情にもろくてあきやすい日本人

テレビは野次馬根性とサディズムが売りもの・93

馬鹿にされても怒らない人びと・100

日本の心、「鬼」・107

「ブーム」ばやりの日本・112

第五章 それはニッポンの常識です

不思議な儀式、「自己紹介」・ 121

ラーメンは中国料理？・ 129

儒教的精神と「忍ぶ恋」・ 138

天皇陛下は日本の「大家さん」・ 145

第六章 ガイジンと日本および日本人

香港と日本・ 153

香港人の持つ日本観・ 156

在日留学生と日本人・ 162

第二章

日本の弁論大会に出場して

